

□平成 26 年度自然史博物館活動の評価について

(群馬県立自然史博物館専門委員 石川 貴敏)

平成 26 年度の同館における事業活動の成果及び評価結果の説明を受け、実際に館内（展示室や収蔵庫など）を視察させていただき、国内を代表する自然史博物館として適正に運営されていることを理解しました。一方、自然史博物館だけでなく、現在の公立博物館には、これまで以上により多くの機能や役割が求められているのが現状です。また、平成 23 年の東日本大震災を経験し、最近も台風や竜巻、ゲリラ豪雨、土石流、火山の噴火などや、地球温暖化に伴う様々な自然環境の変化（生物種の減少や変化などを含む）を体験する私たちにとって、自然史博物館の役割はさらに大きなものとなっているのではないかと思います。こうした背景を踏まえ、より一層活発に活動を展開し、情報を発信する博物館として機能することを願っています。以下は、同館の評価結果をもとに記します。

「資料の収集・保存と活用」に、収集資料のデータベースのバックアップや館外でのデータ保存について記載されていますが、リスクマネジメントの観点から絶えずこうした意識を持って取り組んでいただきたいと思います。また、収蔵スペースの不足が深刻な課題として挙げられていますが、館内で解決できない場合は、館外での保管なども視野に、有効で現実的な対策を講じていただきたいと思います。県立博物館として、県内の博物館における収蔵資料のリスクマネジメントについても、各館と情報や課題の共有化を図るなど、新たな一歩を踏み出していただければ、群馬県内の文化資産を護り伝える博物館として、さらに望ましいのではないかと考えます。

「調査研究」には、市民参加・連携型の調査が伸び悩んでいると記されています。博物館の魅力は、実物（資料）を介した新たな発見や専門家である学芸員とのふれあいを通じた多くの気づき、専門的な（学問・研究）領域への興味・関心、日常生活に生かすことのできる知恵の体得などではないかと思います。市民や各種機関・団体との連携、さらには博物館の支援組織のあり方を含めた、よりよい事業の企画・実施を期待しています。

博物館の魅力や活動をより多くの人々に届けるためには、広報や情報発信は欠くことのできない大切な取り組みです。これからも絶えず有効な手段を検討し、講じてもらいたいと思います。

先述したように、公立博物館の役割は拡大を遂げています。あらゆる人々が楽しむことができる博物館づくりを推進する上で、新しい知識や技術を体得する研修機会は重要です。予算や日程上の制約があるのは頷けますが、学芸員や職員の方々の研修機会の確保・拡大を望みます。

同館は、平成 28 年度に開館 20 周年を迎えます。開館 20 年を機に、「群馬県立自然史博物館のこれからのあり方」に関するメッセージを発信して欲しいと願っています。

(平成 27 年 11 月)